

自らの生から公共の知を共創する 次世代市民の育成に向けた教育の開発

Development of Educational Curriculum and Programs for the Citizen of Next-generations who can co-create public knowledge based on their own life experiences

研究代表者 岡部美香(人間科学研究科 教授)

研究協力者

[学内] 高木万由葉(人間科学研究科 博士前期課程) 高木琳太郎(人間科学研究科 博士前期課程) 古守真凜(人間科学研究科 博士前期課程)

増田叶夢(人間科学研究科 博士前期課程) 有村龍也(人間科学研究科 博士前期課程) 白田和哉(人間科学部2回生) 柄谷彩景(人間科学部2回生)

入江志保(基礎工学部2回生) 杉本旬(文学部1回生) 伊藤武志(SS1 教授) 今井貴代子(SS1 特任助教)

共同研究機関・連携機関

日本学術会議 日本教育学会 大阪府教育庁 Daigasグループ“小さな灯”運動 大阪ガスネットワーク(株) 事業基盤部コミュニティ企画チーム

1. プロジェクト概要

子どもやマイノリティの人びとをはじめとする「当事者参加型」の教育・福祉と、そのような教育・福祉を通して「市民参加型」の社会を構想・構築する——これが、私たちのプロジェクトのめざすところ。このような教育・福祉、そして社会を実現するためには、まず、これまで社会のなかでずっと使用され続けてきた、とはいえ、実際にはもうすでに現実に即さず機能不全を起こしつつあるようなカテゴリー分けやシステムの区分——例えば、行政や学問の領域の区分、大人／子ども、男／女、専門家／素人非専門家、西洋／非西洋、ノーマル(「ふつう」)／アブノーマル(「逸脱」)、公／私、官／民など——といった境界(boundaries)をあらためて問い直す必要があります。そして、必要ならば、境界線を引き直す、境界線をなくす、境界線を越えて／超えて協働するなどの手立てを講じることが今日、必要になってきています。

この問い直しの過程において何より重要なのは、教科書や行政文書、マスコミなどが提示するオーソリティ(権力をもっている諸機関や人びと)からの「借り物」の言葉ではなく、子どもやマイノリティを含む市民一人ひとりが自らの生を形象するために共創する〈ことば〉を重視すること、そしてその〈ことば〉を、よりよい社会を構想・構築するために、私たちの〈公共の知〉へと協働しながら醸成していくことのできる次世代の市民を育成することです。こうすることによって、従来のカテゴリー分けやシステムの区分によって排除ないし周縁化されてきた人びとを置き去りにすることなく、当事者をはじめとする市民一人ひとりが参加しながら、さまざまな社会改革を進めることが可能になります。

本プロジェクトでは、さまざまな境界のあり様を問い直して再構成するという理論的・実践的な試みを展

開しています。また、子どもやマイノリティの人びとを含む市民一人ひとりが共創する〈ことば〉を〈公共の知〉ととらえることができるような教育カリキュラム・プログラムの開発をめざします。これらの活動を通じて、最終的には、子どもやマイノリティの人びとを含む市民・当事者が協働して〈ことば〉を共創したり発信したりするプログラムやチーム体制の構築にも取り組みたいと考えています。

2. 2023年の取り組みと成果と プロジェクトの今後

① SDGs教育

SDGsがめざす「誰一人取り残さない」社会。また、すべての人びとの生(生命・生活・人生)が生き生きとWell-beingであるような社会。そうした未来社会を構想し、これから構築していくためには、未来の社会を実際に担う「当事者」であることもたちがその構想・構築の過程に参加していることが根本的にかつ極めて重要です。

そこで、2023年は、G7、G-Science 学術会議が日



本で開催されるのを機に、SSI第5回シンポジウム「私たちの創る『誰一人取り残さない』未来の社会」のプログラムI「私たちが取り組むSDGs—日本から世界へ—」(3月18日開催)、プログラムII「私たちが創りたい未来の社会—大人たちに提言—」(3月21日開催)を企画、実施いたしました。プログラムIでは、大阪府立堺工科高等学校(定時制の課程)、福島県相馬市立中村第二中学校、盈進中学高等学校、東京都立川学

園、群馬県立前橋高等学校、大阪府立福井高等学校、大阪府東大阪市立上小阪中学校、熊本県立水俣高等学校、開智未来中学高等学校の生徒さんたちが、自分たちの実践／構想しているSDGsの試みを世界に向けて発表しました。また、プログラムIIでは、よりよい未来の社会を構想・構築するために現行の社会問題にどう取り組めばよいかを、日本全国から参加した高校生が海外の高校生・大学生と英語で議論しました。その際、大阪大学の大学生が高校生と大学生のグループディスカッションをサポートしました。詳細は、次のHPをご覧ください(<https://www.ssi.osaka-u.ac.jp/activity/salon/5thssisymposium-2/?sortcat=cat01>)。

② 演劇教育アクションリサーチ

大阪ガスネットワーク(株)事業基盤部の皆さんと劇作家・俳優の小栗一紅さんとともに、大阪府内の児童養護施設の子どもたち(職員の方々も同伴)に向けた「しゃべる、きく、あそぶ」ワークショップを、それぞれの施設で(ないしは大阪ガス社内にある会場で)5回行いました。

また、力まず自分の〈ことば〉を話せるようなほぐれた、でも芯の強い身体づくりをテーマにした、子どもたち向けのワークショップをしたいというNPO法

「当事者参加型」の教育・福祉を通して
「市民参加型」の社会を構想・構築する



人や学校・施設の教職員の方々など大人に向けたワークショップも2回、実施いたしました。2024年度も引き続き、子どもおよび大人に向けたワークショップを実施したいと考えています。

③ 子どもたちの「いのち宣言」を大学生がサポート

大阪大学が関西経済3団体和発起した「いのち会議」の一環として、現在、大阪大学の大学生・大学院生が、子どもたちと行うワークショップを企画しています。幼稚園の子どもたちに向けた紙芝居の創作とゲームの開発、遊びを通して小学生・中学生が「多様な人たちが参加できるルールを自分たちで創る」企画、そして、SDGsとは何かをいまいちど高校生とともに捉え直し、未来社会のあり方を議論する企画など、さまざまな企画が進行中です。企画の内容をよりいっそう充実したものにするべく、2024年2月には、長野県伊那市立伊那小学校的教育実践を見学させていただくことも計画しています。上記の企画は、2024年度に、大阪府教育庁やさまざまな企業の皆様のご協力を得ながら、一つひとつ実践していく予定です。